

ひと

「熟議は民主主義の魂」と唱える米スタンフォード大教授

James Fishkin

ジェームズ・S・フィッシュキン さん (63)

世界中でお手本と信じられていた米国民民主主義のあり方に疑問を投げかけたのは24年前。大統領選のさなかだった。「最初の小さな州の予備選の結果が大統領選の流れを決めてしまう。予備選に影響を与える世論調査は政治家的印象的な一言でつくられてしまう」

その欠点を補うため、考えたのが、討論型世論調査(DP)だ。政策について世論調査をする。回答者の中から数百人を一堂に集め、徹底討論する。その後、調査と同じ質問をすると「思いつきではなく、考え抜いた回答に変わる。これこそ国民の本当の声だ」。

これまで欧州や中国など20カ国以上を訪問し、DPを実施。「熟議は民主主義の魂」と訴える。日

本でも5度のDPにかかわり、1月にも来日した。日本の政界に通じてはいないものの、「5年で6人の首相なんですよ」と笑う。

「DPは学会で空理空論と退けられてきたが、実際のだ」と反論する。討論の場に子育て中の女性を呼ぶためベビーシッターを手配したり、牧場で牛の乳搾りをして、いる女性に代わりの人を派遣したり。「必要なら何でもする」

「民主主義と同じぐらい愛している」妻のシェリーさん(61)は同じ大学の文学教授。近著「人々の声が響き合うとき」の執筆に際しては厳しい助言を受けた。「熟議では、相手の話をよく聞くことが大切だ」

文・鶴岡正寛 写真・松本敏之

